

## 第5回日本白鳥の会総会 結果報告

1. 日 時 昭和52年9月4日(日) 午前9時30分～午後3時
2. 場 所 東京都港区赤坂 「虎ノ門共済会館」
3. 出席者 家田会長 以下 21名 来賓 2名
4. 議事次第

- (1) 会長あいさつ
- (2) 来賓祝辞

(A) 環境庁 鳥獣保護課長 野 辺 忠 光 氏

要旨(日ソ渡り鳥条約の批准を目標に努力中。ハクチョウ類の給餌はケースバイ・ケースで一率に律することはできないが、ただかわいいからといってエサをやるのはよくない。野生全般では自然のままがよい。皆さんの要望は陳情書や会館でよく理解しており、今後も努力していきたい。)

(B) 山階鳥類研究所 吉 井 正 氏

要旨(標識ハクチョウの日本における追跡調査の成果は目をみはるものがあり、IWRBでも注目している。日本白鳥の会の組織の力を評価したい。来シーズンも実施する着標活動にそなえ、アメリカから新しい標識を取寄せたので、各渡来地における着標の希望をとりたい。)これに対し下記の地区会員から着標希望があった。

クッチャロ湖 (30) ウトナイ湖 (10) クッジャロ湖 (10) 小 湊 (10)  
最上川 (10) 佐 瀧 (10) 伊豆沼 (10)

- (3) 議長選出

松井副会長を選出

- (4) 報告事項

本田事務局長が、下記(会報164に掲載)について報告した。

- (A) 今シーズンの定時定点調査結果について
- (B) 標識ハクチョウ調査結果について
- (C) 小川原湖研修結果について
- (D) 環境庁長官への陳情について

- (5) 審議事項

- (A) 昭和51年度 事業と決算について
- (B) 昭和52年度 事業と予算について

(以上については、概報のとおり承認された。)

- (C) 会計年度の改正について

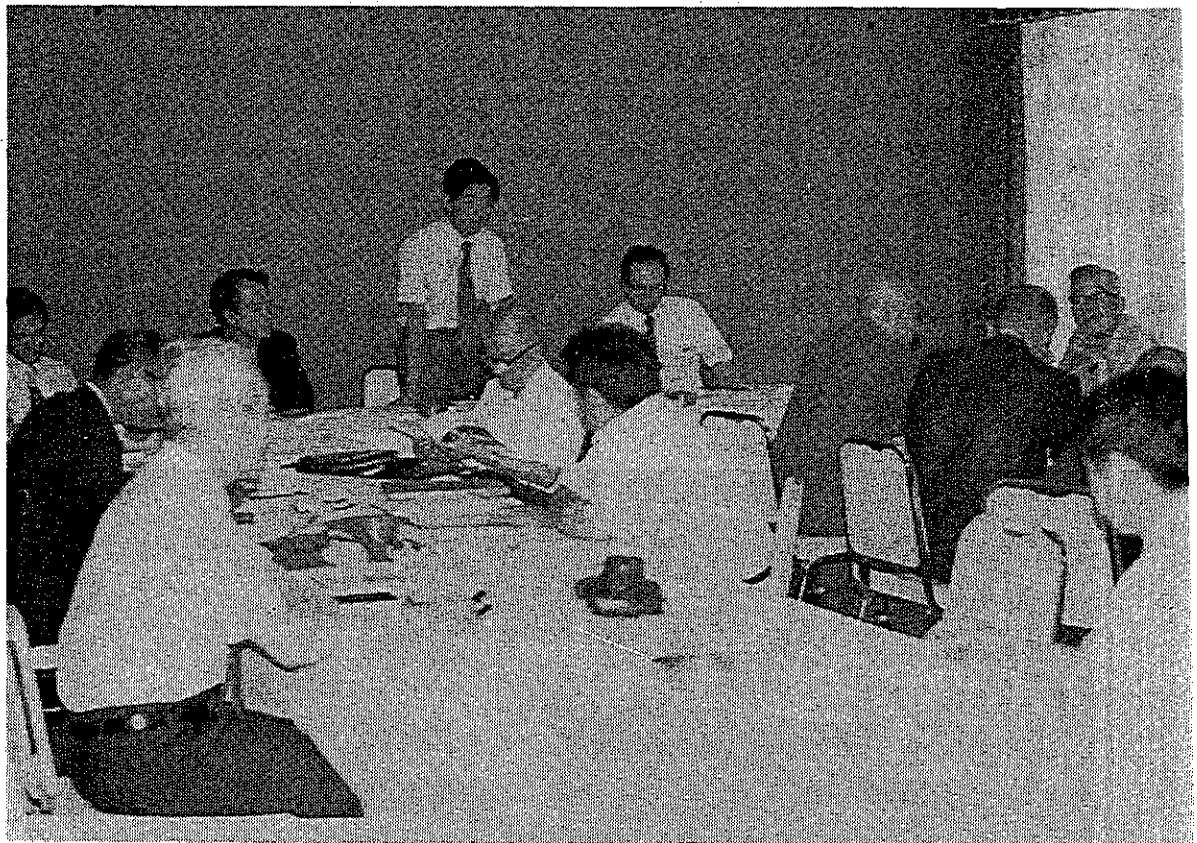
(会則第13条が下記のように改正された。)

「本会の会計年度は、毎年9月1日にはじまり、翌年8月31日に終わる」

- (D) IWRB 日本支部設立について

IWRB日本支部設立に関し、下記の四項目が承認された。

- ① 負担金は、日本野鳥の会・鳥類保護連盟・WWF日本委員会・ガンを守る会・日本白鳥の会等で分担しあい、1977年度より納入していく。
  - ② 窓口は従来の山階鳥類研究所から、日本野鳥の会に移し支部事務局を置く。
  - ③ 1977年度IWRB代表者会議が9月、スイスのグワットで開催されるので、日本白鳥の会理事阿部 学氏を代表として派遣する。阿部氏の資格については関係方面の了承もえた。  
日本白鳥の会では、前西独会議派遣の前例にならい、費用募金運動をする。
  - ④ IWRB事務局長マシューズ博士が11月中に来日するので、日本支部の設立をはかるとともにマシューズ博士の歓迎態勢を各訪問地の本会会員が策定実施する。
- (E) 第三回識別研修会会場について  
(昭和53年3月 猪苗代湖で実施することになった。)
- (F) 会報「日本の白鳥 165」に掲載する研究論文・観察記録について  
(研究論文は結論だけでも箇条書きにし、英文の要約を添付すること。)
- (G) 定時定点調査について  
来シーズンの定時定点調査活動を強化拡充するため、とくに未報告地における現地態勢の強化と有力メンバーの確保に努力し、確実迅速な報告を求める。



(第五回総会で立って祝辞を述べる野辺環境庁鳥獣保護課長)

## 總會における研究討議主な発言要旨

### 共通テーマ「オオハク・コハクの食性について」

#### 横 田 義 雄 氏

オオハク・コハクは何を食っているか。実際の観察記録を出していく必要がある。ハクチョウは、ほんとうにお茶ガラを好むか。また菓子やパンを好むからといって、やることを放任してよいのか。

給餌は客寄せに結びつき、各渡来地ごとの給餌競争となり、ハクチョウといえば餌づけといった誤った定着観念を植えた。

一ばん大切なことは、ハクチョウをおどろかささないことであり、人工給餌はハクチョウが自然食を採れない状態のときだけにやるというように限定すべきである。

#### 古 川 博 氏

ハクチョウは、草食性だともいわれ、おもに水性植物を摂取しているが、ときと場合、条件次第では陸の草も食べるし魚も食べる。魚を食べることについては、三上士郎氏の観察例にもあるとおり。餌づけの初期は茶ガラもたしかに食べた。つまり極限の経験が、それらのものを食べさせるのであろう。

#### 菊 地 昶 史 氏

給餌者の努力が、社会にもはやされ好ましい評価を受けるという時代は終りつつある。給餌者に対する批判も多様化してきており、素朴な給餌者たちを困惑させている。

#### 阿 部 学 氏

日本白鳥の会結成以来、白鳥に関心をもつ人たち、とりわけ毎年總會に出席する人たちの意識構造が変ってきたように思う。

当初各渡来地のせまい視野のなかで餌づけ即保護活動という観念が先行していたように思われるが、近年、相互の情報交換がすすむにつれ、基礎的な研究活動を尊重するなど、科学的な視点をひろげていき多様な価値観をもつに至ったことは大きな前進である。

白鳥という貴重な天然資源を人間が利用または活用していくという観点からいえば餌づけ活動もバンディングもそれぞれ理由のあることである。